

り、普遍的妥当性を有する解決策を提示したりすることは困難です。そんなことをする意味もなく、それを行うことがわたしたちの使命であるわけでもありません。自国の状況を客観的に分析するのは、各キリスト教共同体の務めです¹⁸⁵」。

185 以下では、歴史におけるこの時点で根本的と思われる二つの大きな問題に焦点を当てたいと思います。人類の未来を決定づける問題だと思われまますので、かなり広範に展開させます。一点目は貧しい人々の社会的包摂^{ソシヤル・インクルージョン}について、二点目は平和と社会的対話についてです。

II 貧しい人々の社会的包摂^{ソシヤル・インクルージョン}

186 自らが貧しい者となり、貧しい人々や除け者にされた人々につねに寄り添ったキリストへの信仰から、社会においてほとんど見捨てられている人々の全人的発展への気掛かりが生まれます。

神に結ばれ叫びに耳を傾ける

187 すべてのキリスト者とすべての共同体は、貧しい人々が社会に十全に組み入れられるようにするため、彼らを解放し高める神の道具となるよう呼ばれています。それは、貧しい人々の叫びに素直に注意深く耳を傾け、彼らを救うようにということです。聖書にただ目を通すだけで、よいかたである御父がどのようにに貧しい人々の叫びを聴こうとされるのが見いだされます。「わたしは、エジプトにいるわたしの民の苦しみをつぶさに見、追い使う者のゆえに叫ぶ彼らの叫び声を聞き、その痛みを知った。それゆえ、わたしは降^{くだ}って行き、彼らを救い出す……今、行きなさい。わたしはあなたを遣わす」(出エジプト3・7-8、10)。

そして御父は、彼らの必要への気遣いを示されます。「イスラエルの人々が主に助けを求めて叫んだので、主は彼らのために一人の救助者を立てられた」(士師記3・15)。貧しい人々の声に耳を傾ける神の道具であるにもかかわらず、わたしたちが彼らの叫びに対して耳をふさいでいるならば、御父の意志と計画の外にその身を置くこととなります。なぜならば、その貧しい人が「あなたを主に訴えるならば、あなたは罪に問われる」(申命記15・9)からです。そして、貧しい人の必要に対する連帯の欠如は、わたしたちの神との関係に直接影響を及ぼします。「その人が恨みを込めてお前を激しく呪^{のの}えば、造り主は、彼の願いを聞き入れられる」(シラ4・6)のです。つねに古くからの問いへと立ち戻ってください。「世の富を持ち

ながら、兄弟が必要な物に事欠くのを見て同情しない者があれば、どうして神の愛がそのよ
うな者のうちにとどまるでしょう」(二ヨハネ3・17)。また使徒ヤコブが、虐げられた者の叫
ぶ姿をどれほど力強く再現したかとも思い出してください。「ご覧なさい。畑を刈り入れた労
働者にあなたが支払わなかった賃金が、叫び声を上げています。刈り入れをした人々の
叫びは、万軍の主の耳に達しました」(ヤコブ5・4)。

188 こうした叫びに耳を傾けよという要求は、わたしたち一人ひとりが受けている恵みをも
つ解放者としてのわざ自体から生じるものであると、教会は認識しています。ですからそれ
は、ある特定の人たちだけの使命ではありません。「教会は、人類に対するいつくしみと愛
である福音に導かれ、正義を求める叫びを聞き、全力を尽くしてそれにこたえようとして
いる」⁽¹⁸⁾のです。こうした枠組みに、弟子たちに対するイエスの要求は含まれています。「あ
なたが彼らに食べ物を与えなさい」(マルコ6・37)。この命令は、貧困の構造的原因を解
決するための協力や、貧しい人々の全人的発展を促進するための協力を含むとともに、わた
したちが遭遇するきわめて具体的な窮乏を前にしての、日々の素朴な連帯をも意味していま
す。「連帯」という語はいささか使い古されていて、時に誤って解釈されます。しかしそれ

は、時折示される何らかの優しさなどをはるかに超えた意味を有しているのです。連帯は、
共同体の観点から、一部の人による財の独占よりもすべての人の生活を優先する、新たな精
神性を必要としています。

189 連帯は、所有物の社会的役割を知り、財は万人のためにあるという原理が私的所有より
も優先される現実であることを知る者の自然な反応です。財の私的所有は、財を保持し増や
すことが、共通善に対するよりよい奉仕へと向かうことにおいて正当化されます。それゆえ
連帯とは、貧しい人々に支払われるべきものを彼らに返還するという決意をもって生きるこ
とです。このような確信と連帯の習慣が身に着けば、他の構造改革へと道が開かれ、その実
現が可能となります。新たな信念や姿勢を生むことのない構造改革は、その構造自体が遅か
れ早かれ腐敗し、動きが鈍くなり、効果のないものとなってしまいうでしょう。

190 時には、民全体の、そして地上でもっとも貧しい民の叫びに耳を傾けることです。「平
和は人権の尊重だけでなく、民族の権利の尊重に基礎を置いています」⁽¹⁹⁾。悲しむべきことに
人権さえもが、個人の権利や非常に富裕な国民の権利の、過剰な保護の正当化に利用される

ことがあります。各国の独立性と文化を尊重しつつも、地球が全人類のものであり、全人類のためにあることを忘れてはなりません。また、資源の少ない地や開発途上の地に生まれたことよって、その人が十分な尊厳をもたずに生活することが正当化されるわけではないことも忘れてはなりません。今一度繰り返し返す必要があります。「財に恵まれた者は、より寛大な心をもってそれを他者への奉仕に役立てるために、自分たちの権利の一部を放棄しなければなりません」。わたしたちの権利を適切に主張するには、視野を広げ、他の民族や自国の他の地域から上がる叫びに耳を傾ける必要があります。わたしたちは、連帯において成長しなければなりません。それは、「すべての民族が自らの将来を自分で建設していくのを助ける」と同時に、「すべての人間を自分の進歩発展へと招く」連帯です。

191 あらゆる場と状況においてキリスト者は、司牧者に励まされ、貧しい人の叫びを聴くよう呼ばれています。ブラジル司教団はみごとに表現しています。「わたしたちはブラジルの人々、とくに、自らの権利を侵害され、都市の周りや地方で——土地も家もたず、食事も事欠き、健康にも恵まれず——住む人の、喜びや希望、苦悩や悲しみを、日ごとわが身に引き受けたいのです。彼らの窮乏を目にし、その叫びに耳を傾け、その苦悩を知るわたしたちは、すべての人にとって十分な食糧は存在するにもかかわらず、財と所得の不当な分配によつて飢えが生じているという事実に憤りを覚えるのです。浪費が当たり前になっていることが、問題を悪化させています」。

192 わたしたちは、さらなる高みを目指し、さらなる跳躍を夢見ています。すべての人に対しての食料と「尊厳ある暮らし」の保障だけではなく、すべての人の「あらゆる面での繁栄」を訴えたいのです。これは、教育、医療、そしてとくに労働を意味しています。なぜなら、自由で、創造的で、だれもが参加を認められ、そして連帯に基づく労働は、人間にとって、おのおのの生活の尊厳を表現し高めるものであるからです。正当な賃金によつて人は、共同での利用に割り当てられている他の有益なものを、それに応じて利用できるようになるのです。

無駄に走らないための福音に対する忠実

193 他者の痛みを前にして心が打ち震わされるとき、貧しい人の叫びに耳を傾けよという命令がわたしたちのうちで具体化します。あわれみに関する神のことばの教えをあらためて読

んでみましよう。そのことばを教会生活の中に、再び力強く鳴り響かせるためです。福音書はこう宣言しています。「あわれみ深い人々は、幸いである、その人たちはあわれみを受けける」(マタイ5・7)。使徒ヤコブが教えるように、他者に対するあわれみがあれば、神の裁きの際に罪に問われないうえでしょう。「自由をもたらず律法によつていずれば裁かれる者として、語り、また振る舞いなさい。人にあわれみをかけない者には、あわれみのない裁きが下されます。あわれみは裁きに打ち勝つのです」(ヤコブ2・12-13)。この箇所ではヤコブは、バビロン捕囚後のユダヤ人の精神性——救いをもたらす特別なあわれみからくるもの——を最高に豊かに受け継ぐ者として自分自身を示しています。「罪を悔いて施しを行い、悪を改めて貧しい人に恵みをお与えになつてください。そうすれば、引き続き繁栄されるでしょう」(ダニエル4・24)。同じ考えに基づいて、知恵文学は、貧しい人に対するあわれみの具体的実践としての施しについて語ります。「慈善のわざは、死を遠ざけ、すべての罪を清めます」(トビト12・9)。シラ書では、さらに生き生きとした表現で語られています。「水が燃え盛る火を消すように、施しのわざは、罪を償う」(シラ3・30)。同様の総合が新約聖書の中に見られます。「心を込めて愛し合いなさい。愛は多くの罪を覆うからです」(1ペトロ4・8)。この真理は教父たちの精神に深く浸透しました。そして彼らは、異教の快樂追求の個人主義に

対して、二律背反を示す文化で預言者的抵抗を行ったのです。一例のみ挙げておきましょう。「われわれはもし家に火事が起こるならば、もちろん水のある所に走つていき、水で火を消そうとします。……われわれの干し草から罪の炎が燃え上がったときにも、これと同じことがいえます。そのときわれわれは確かに惑乱してしまっています。しかし、いつくしみの心をもつて人を助ける機会が与えられると、われわれは燃え上がった罪の炎を消すための水が差し出されたことを喜びましよう」⁽⁶⁾。

194 このメッセージは、あまりに明白で、直接的で、単純かつ雄弁であるために、教会のいかなる解釈学もそれを相対化しえませんが、それを教会が考察する際には、その勧告の意味を曖昧にしたり弱めたりしてはなりません。むしろ勇氣と熱意をもつてその勧告を受け入れなければなりません。どうして単純なものを複雑にしようとするのでしょうか。概念という道具は説明の対象になる現実との接触を促すためのものであつて、その現実からわたしたちを遠ざけるためにあるものではありません。これは、とりわけ次のような聖書の勧告についていえることです。すなわち、兄弟愛、謙虚で優しさのある奉仕、正義、貧しい人への思いやりなどへの、強い説得力をもつた招きです。イエスはそのことばとわざを通して、他者を認

める道を示されました。これほど明確なことを、なぜ曖昧にするのでしょうか。教理上の誤りを犯すことばかりを心配せずに、むしろいのちと知恵の光の道に忠実であってください。『正統な教え』の弁護者が、時に、許しがたい不正の状況やそれを維持する政治体制に対する、消極性、黙認、共犯の罪で叱責されることがある⁽⁶⁾」からです。

195 聖パウロが、「自分は無駄に走っているのではないか、あるいは走ったのではないか」(ガラテヤ2・2)という識別のためにエルサレムに使徒たちを訪ねたとき、正しさの鍵として与えられた基準は、貧しい人たちのことを忘れないということでした(ガラテヤ2・10参照)。この偉大な基準は、パウロの共同体が異教徒の個人主義的生活様式に引きずり込まれないためのものでしたが、個人主義的な新たな異教精神が広がる現代においても十分な妥当性を有しています。わたしたちは福音の美そのものを必ずしもふさわしく表すことはできませんが、欠いてはならない一つのしるしがあります。それは、最下層に置かれている人々、社会から捨てられ不要なものとされている人々のための選択です。

196 時にわたしたちの心や頭は鈍くなってしまいます。現代社会が提供する消費や娯楽もつ膨大な可能性に、我を忘れ、それに興じ、恍惚としています。こうしたことによって、わたしたち皆に影響を及ぼす一種の疎外が生まれます。なぜなら「ある社会において、その社会組織、生産と消費が、そのような自己贈与と人々の連帯の樹立を困難にするなら、そのときこの社会は疎外されている⁽⁷⁾」からです。

神の民における貧しい人々の特権的地位

197 神のみ心には貧しい人々のための優先席があります。神ご自身が「貧しくなられた」(コリント8・9)からです。神のあがないへとわたしたちが至る道のりのあらゆる場所において、貧しい人々がその道しるべとなります。わたしたちの救いは、大帝国の外れの辺鄙な小村に住む身分の低い少女から発せられた「はい」によってもたらされました。救い主は、動物たちに囲まれた飼いの葉桶の中で、もともと貧しい子どもたちと同じように生まれ、神殿で二羽の鳩の雛^{ひな}とともにささげられました。鳩は、小羊をささげる余裕のない人のささげものです(ルカ2・24、レビ5・7参照)。そのかたイエスは、平凡な労働者の家で育ち、生活の糧を得るために自ら働きました。神の国を告げ知らせ始めたとき、貧しい群衆がその後に従いました。こうして、イエスご自身の次のことばの意味が明らかになりました。「主の霊が

わたしの土におられる。貧しい人に福音を告げ知らせるために、主がわたしに油を注がれたからである」(ルカ4・18)。痛みを抱えた人々、貧困にあえいでいる人々にイエスは、神はあなたたちをその心の中心に置いておられると約束しました。「貧しい人々は、幸いである、神の国はあなたがたのものである」(ルカ6・20)。イエスは彼らと同じ者になりました。「わたしが飢えていたときに食べさせてくれた」。そして、彼らに対するあわれみは天国への鍵であると教えたのです(マタイ25・35以下参照)。

198 貧しい人を優先することは、教会にとって、文化的、社会的、政治的、哲学的領域に属することである以前に、信仰の領域に属することです。神は「最初にそのあわれみを」¹⁶⁵貧しい人々にお与えになります。神からのこの優先的な扱いは、すべてのキリスト者の信仰生活に影響を与えます。「キリスト・イエスにもみられるもの」(フィリピ2・5)をもつよう呼ばれるのです。この呼びかけに力づけられて、教会は貧しい人のための選択を「教会の伝統全体があかしている、キリスト者の愛の実践においてとくに優先されるもの」¹⁶⁶として理解したのです。ベネディクト十六世が教えたように、この選択は「わたしたちのために貧しい者となられた神という、キリスト教の信仰に内在するものです。神のその貧しさによって、わた

したちは豊かにされるのです」¹⁶⁵。ですから、貧しい人のため、教会は貧しくあってほしいと思います。貧しい人は多くのことを教えてくれるのです。彼らは信仰の感覚(sensus fidei)にあずかるのに加え、自分自身の苦しみをもってキリストの苦しみを知っています。わたしたちは皆、彼らから福音化されなければなりません。新しい福音宣教とは、彼らの生活がもっている救いをもたらす力を認め、彼らを教会の歩みの中心に置くようにとの招きです。彼らの中にキリストを見いだし、彼らの代弁者となり、さらに彼らの友となつて、彼らに耳を傾け理解し、彼らを通して神が伝えようと望んでおられる不思議な知恵を受け取るよう招かれていなのです。

199 わたしたちのかかわりは、促進と支援の行動や計画にとどまるものではありません。聖霊が引き起こしているのは、活動への過剰な傾倒ではなく、まず何よりも「ある意味で自己と一体とみなし」¹⁶⁶ている他者に目を向けることです。愛のまなざしは、人を本当の意味で心配することへの最初の一步です。そこからその人の幸福を実際に求めるようになるのです。

それは、彼ら特有の善良さ、暮らしのあり方、その文化、その信仰生活をもって彼らの真価を認めることです。真の愛はつねに観想的であつて、必要性や虚栄からではなく、彼らの外

見を超えた美しさゆえに、わたしたちは彼らに仕えさせていただくのです。「ある人が他の者に対して好意を示すというその愛からして、その者に無償で何かを授けるということが生ずる」⁽¹⁶⁾のです。貧しい人は愛されるとき「価値が高いと判定され」⁽¹⁶⁾ます。貧しい人のための真の選択は、いかなるイデオロギーとも、また個人的あるいは政治的な利益のために貧しい人を利用しようという意図とも異なります。実際に心を込めて寄り添うことよってのみ、彼らの解放への道において、ふさわしく同伴することができるとです。こうして初めて、「貧しい人々が、あらゆるキリスト者共同体を『自分たちの家』と感じる」ことができるようになります。「この姿こそ、神の国のよい便りの、最大で効果的なあかしではないでしょうか」⁽¹⁶⁾。貧しい人々のための優先的な選択がなければ、「最大の愛であるとはいえ福音の告知も、人に理解されず、今日の情報社会が毎日わたしたちに聞かせることばの洪水の中でおぼれてしまう危険があります」⁽¹⁷⁾。

200 本勧告はカトリック信者にあてられていますので、痛みをもって述べたいのですが、貧しい人が苦しんでいるもつともひどい差別とは、霊的配慮の欠如なのです。貧しい人々の大多数は、信仰に対して特別に開かれています。彼らには神が必要で、わたしたちは彼らに、

神の友情、神の祝福、神のことば、秘跡の執行、信仰における成長と成熟の道への促し、これらを差し出すことをやめてはなりません。貧しい人々を優先する選択は、おもに彼らの特権的に優遇した宗教的配慮につなげなければなりません。

201 自分の生活における選択のために他のことがらにより注意を払っているので、貧しい人に対しては距離をおいているなどと、だれもいつてはなりません。これは、学問、実業、専門職の世界、さらには教会においてさえ頻繁に聞かれる言い訳です。確かに、信徒に固有な召命と使命は、すべての人間活動を福音に基づいて造り変えるために、地上のさまざまな現実を変革することであると一般的にはいえませんが、貧しい人と社会正義に対し心を砕くことを免れているであろう人は、だれ一人いません。「霊的な回心、神と隣人への強い愛、正義と平和に対する熱意、貧しい人と貧困についての福音的な意味づけは、すべての人に要求されています」⁽¹⁷⁾。わたしは、こうした発言が、実際的な影響力を何らもたない、ただの注釈の対象にしかなくなっているのではという懸念も抱えています。にもかかわらず、キリスト者の開かれた、正しい心構えに信頼してお願います。この刷新の提言を受け入れるための新たな道を、共同体において模索してください。

経済と所得分配

202 貧困の構造的原因の解決は喫緊の必要事です。それは、成果を上げ社会秩序を整えるという実利的要求のためだけではなく、社会を脆弱で恥ずべきものにし、新たな危機をもたらすだけの病理から回復させるためなのです。特定の切迫事に対処する福祉計画など、単に仮の対応にすぎないと考えるべきです。市場と金融投機の絶対的自律性を放棄し、格差を生む構造的原因に敢然と立ち向かうことで、貧しい人々の問題が抜本的に解決されないかぎり、世界が抱える問題は一つ決定的には解決されません。格差は社会悪の根源なのです。

203 人間一人ひとりの人格の尊厳と共通善についての課題によって、あらゆる経済政策は形成されなければなりません。しかし、時にそれは、真の十全な発展についての展望も計画も欠いた政治演説を膨らませるための、外から取って付けた、ただの付録のように思われています。このような体制にとって厄介なものとなっていることばは、いかに多いことでしょう。倫理の話題も世界の連帯の話題も煩わしい、財の分配の話題も煩わしい、雇用確保の話題も煩わしい、弱者の尊厳の話題も煩わしい、正義の追求を求める神の話も煩わしい——そんな

ふうになつていのです。場合によっては、こうしたことばは、ご都合主義者に利用される対象になり屈辱を与えられています。こうした課題に対する勝手気ままな無関心は、わたしたちの人生とその発するすべてのことばとを空虚なものとしませす。実業家の使命とは、人生の広く豊かな意味を求め続けるといふ気高い仕事です。そうした仕事は、地上のあらゆる財を増やし、だれもがその恩恵にあずかれるようにするための努力によって、共通善への真の奉仕を可能にするのです。

204 もはや、市場における見えざる力と見えざる手とに信を置くことはできません。公平な成長は、経済成長を前提としつつも、それ以上の何かを求めています。とくに、所得のより公平な分配、雇用機会の創出、単なる福祉国家的政策によって得られるものを超えた貧しい人々の全人的向上——それらへと向かう、決断、計画、仕組み、作業が必要とされるのです。わたしは無責任に大衆に迎合しているわけでは決してありませんが、もはや経済は、利益率向上のための労働市場縮小と、それによって生み出される新たな排除という、新手の毒のごとき対策に頼ってはならないのです。

205 神に祈り求めます。地上の悪を表面的ではなく、根本からの効果的な改善へと向かわせる、真の対話を始める能力を備えた政治家を増やしてください。政治は多くの誹謗中傷を受けはしますが、それは、共通善を求めるための、崇高な使命、貴重な愛のわざです。⁽²⁴⁾「身近な関係(友人、家族、小集団)だけでなく広範な関係(社会、経済、政治)の源でもある」⁽²⁵⁾愛を確信しなければなりません。主よ、社会と人々の実状に、貧しい人の生活に、真に心を痛める政治家をさらに増やしてください。為政者と財界首脳は、視線を上げて視野を広げ、すべての市民がふさわしい仕事に就くことができ、教育が受けられ、医療にあずかることができるよう働かなければなりません。なぜ、自分の計画に靈感を与えてくださるよう、神に助けを願わないのですか。超越者へと開かれることで、政治と経済における新たな精神性は形成され、それは、経済と社会的共通善の間に横たわる決定的な断絶を克服する助けになる、わたしはそう確信しているのです。

206 経済とは、そのことば自体が示すとおり、わたしたちの共通の家である世界全体の、ふさわしい管理を得る手段でなければなりません(訳注「a family」は「家」「居住」などの義のギリシア語 family)。「法」などは意味する νόμος に由来する)。地球上の特定の地域で一定の規模で実行されるすべての経済活動は、世界全体に影響を及ぼしま

す。したがって、いかなる政府も、共同責任を免れて行動することはできません。事実、一国家レベルでの解決を見いだすことは、つねに著しく困難になっています。世界規模の巨大な矛盾によって、一国の政府は解決すべき問題で埋め尽されてしまからです。健全な世界経済の実現を求めるならば、歴史の現時点で、より効果的な干渉の方法が求められます。それは各国の主権を保持したまま、いくつかの国にだけではなくすべての国に経済的福利を保障するものです。

207 貧しい人々の尊厳ある生活、そしてすべての人の社会参加支援のための、創造的取り組みや効果的協力もせずに安穏な状態にとどまろうとすれば、いかなる共同体もまた、崩壊の危機を免れません。たとえ社会問題について語ったり、政府の批判をしていたとしてもそうなのです。そして、宗教的な実践、実りのない集い、中身の無いスピーチによって偽装する霊的な世俗性の中に、いとも簡単に埋没してしまうことでしょう。

208 わたしのことばに気を悪くした人がいるならば、この発言は愛と誠意の発露であると申し上げたく思います。それは決して、いかなる個人的関心でも政治的イデオロギーでもあり

ません。わたしのことばは、敵意でもなければ反対者のそれでもありません。わたしが関心を抱いているのは、個人主義、無関心、利己主義の精神性にとらわれている人が、それらの無価値な鎖から解き放たれ、より人間らしく、より気高く、より実り多い生き方、考え方へと到達するようにということ、ただそのみなのです。それによって、彼らの地上での歩みには尊厳が与えられるのです。

弱さへの心配り

209 最高の福音宣教者であり、ご自身が福音そのものであるイエスは、もつとも小さい人と特別に同じものとなりました（マタイ25・40参照）。このことは、すべてのキリスト者は、地上でもつとも弱い人々に心を配るよう招かれていることを思い起こさせます。しかし、現代の「成功」と「自立」のモデルにおいては、取り残された人、弱い人、生活手段をほぼ断たれている人への出資は、理にかなわないこととされているようです。

210 わたしたちは、新たなかたちで現れている貧困と弱さに密に接するために、心を碎かなければなりません。見かけ上それらは、具体的な益を直ちにもたらすものではありませんが、そこにおられる苦しむキリストに気づくよう、わたしたちは招かれています。すなわち、家のない人、依存症の人、難民、先住民、孤独のうちに見捨てられてしまう高齢者などのことです。移住者の問題が、わたしに特別な課題を突きつけています。わたしは、国境をもたない教会、すべての者の母である教会の司牧者であるからです。ですからわたしは、寛大に門戸を開くよう各国にお願いします。それは、その地のアイデンティティの崩壊を恐れることなしに、新たな文化的総合を創造できうるものです。非難されるべき不信を乗り越え、違いを受け入れ、それを新たな発展の要因としている都市とは、何と美しいものでしょうか。その建築の意匠において、他者とのつながりや相互の関係や他者を喜んで認めることに配慮した空間が豊富な都市は、実に美しいのです。

211 種々の形態の人身売買の標的となる人々の境遇には、つねに心が痛みます。わたしたち皆に訴える、神の叫びに耳を傾けてください。「お前の弟は、どこにいるのか」（創世記4・9）。奴隷にされている、あなたの兄弟姉妹はどこにいますか。非合法の町工場、売春組織、子どもを利用する物乞い、隠れて働かねばならない非正規滞在者の労働——そうした中で、あなたが日々殺している兄弟はどこにいますか。ほんやりしてはなりません。それは、

数多くの共犯者を生むことなのです。神の問いは、あらゆる人に向けられています。マフィアによるこうした異常な犯罪はわたしたちの町に根づいています。そして多くの人が、安穩として黙っているという共犯によって、己の手を血で染めているのです。

212 疎外され、虐待され、暴力を受け苦しんでいる女性は、二重の意味で貧しいのです。なぜなら、しばしば彼女たちには、自分の権利を守る可能性がほとんどないのです。しかし、わたしたちは彼女たちに、家族の弱さを守り気遣う、立派で勇気ある日常的行為をつねに見いだしています。

213 教会が優先的に気遣おうとするこうした弱者には、出生前の子どもも含まれています。出生前の子どもは、もつとも無防備で汚れない存在です。今日、自分の望むようにその子らを扱うために、その人間としての尊厳が否定されようとしています。そのいのちを奪い、その行為をだれも阻止しえなくする法の制定を推進しているのです。出生前のいのちを守るうとする教会の姿勢は、しばしば無遠慮に愚弄されています。イデオロギー的、蒙昧主義的、保守的な立場だといわれるのです。しかし、出生前のいのちの保護は、あらゆる人権の擁護

と密接につながっています。それは、人間存在は、あらゆる状況、そして成長の各段階において、つねに神聖かつ不可侵なものであるという確信を前提としています。人は、それ自体が目的であって、他の障害の解決のための手段となることは決してありません。こうした確信が失われれば、人権擁護のための確たる不変の基盤は維持できなくなり、人権は時の権力の都合に左右されることとなります。すべての人間のいのちは不可侵な価値を有するということは、理性だけをもってしても十分に認識できることですが、信仰の目をもって見れば「人類の人格的尊厳を侵すことは、神に反抗することであり、創造主を侮辱することにほかならない⁽¹⁶⁾」といえます。

214 これは、人格の価値に関するわたしたちのメッセージにおける一貫性にまさしくかかわる問題ゆえ、教会がこの問題について立場を変えることを期待すべきではありません。わたしはこのことにおいては、あくまでも誠実でありたいと思います。これは改革や「近代化」に左右されるものではありません。人間のいのちを奪うことで問題を解決しようとすることは進歩ではありません。しかしわたしたちは、中絶がその深い苦しみの手早い解決法のように思われてしまう耐えがたい状況に置かれた女性に対して、ほとんどふさわしく寄り添って

はこなかったこともまた事実です。とくに、その胎内で育っている生命が強姦の結果である場合、あるいは極度の貧困の中で生じた場合にはそのようなのです。このような痛ましい状況を、だれが理解せずにいられるでしょうか。

215 そのほかにも、弱く無防備な存在があります。それは、しばしば経済的利益に翻弄され、無差別な利用に供される存在です。つまり、被造物全体のことです。人類は単にそこから恩恵を受けるだけではなく、他の被造物の管理者でもあります。わたしたちの肉体的現実を通して、神はわたしたちをとりまく世界とわたしたちとを、かくも密接に結びつけました。土地の砂漠化は、それぞれにとつての病気のようなものです。特定の生物種が絶滅すれば、それをまるで手足が切断されたかのように悲しむはずで、わたしたちの歩みが、わたしたちの生活と未来の世代の生活に影響を与える、破壊と死の兆候を残してはなりません。⁽¹⁷⁾ この意味でわたしは、フィリピン司教団が数年前に表明した美しく預言的な嘆きを自らの問いかけとします。「森には信じられないほど多様な虫たちが棲み、ありとあらゆる役割をせわしく果たしていました。……空には鳥たちが舞い、その色鮮やかな羽と声色豊かなさえずりは、緑の森に彩りと歌声とを添えていました。……神は、わたしたちのため、特別な被造物であ

るわたしたちのため、この地を望まれたのです。その地を破壊し、荒れ野にしてしまうことなどないようにと。……一晩降った雨の後で、あなたが住まう地を流れる茶色く濁った川を見てごらん下さい。そして思い起こしてごらん下さい。川が海へと運んでいくのは、大地を生かしている鮮血なのだ。……排水溝の中で、わたしたちが汚してしまった多くの川の中で、魚が泳ぐことができますか。あのパツシグ川のように。海の中のすばらしい世界を、色彩も生命も奪われた水底の墓地へと変えてしまったのは、一体だれなのですか」⁽¹⁸⁾。

216 アッシジの聖フランシスコのように、小さな者でありながらも神の愛において強いキリスト者は皆、人々の弱さと、わたしたちが生きる町や世界の弱さに心を配るよう呼ばれているのです。

Ⅲ 共通善と平和な社会

217 ここまで、喜びと愛について多くを述べてきましたが、神のことは平和の実りにについても語っています（ガラテヤ5・22参照）。